〔世間子息氣質一〕取付世帶は表向を張つて居る大鼓形氣

亭主は道具に、倍うつての直打書、○中略　櫺木壹本代八匁、

〔三省錄四附言〕明和九年、大火のとき、江戸中うりありきたる文に、　大火事相場あらまし○中略

一すりこ木　五拾文　三拾文

〔耽奇漫錄九〕百歳又助平造の桑の木摺木及杓子、箸、

〔寶藏四〕摺子木

おなじくもの有、其きをひによろるゝ、つねに折釘にかゝりて、あたかもさかほこに似たり、いづれのものをかさぐり出し、いづれの去たゞりをかなせる、取て柱杖とせんとすれば其たけみじかく、金剛杖とせんとすれば其形ぬくし、大義ながら一生うつぶきゐて外を見る事なかれといへば、あるじが身のほどにこそにたれ、にくやあたまも丸し、

〔風俗文選拾遺二〕摺鉢摺小木の辨

摺小木といふ物有、其性木を以て作る、山椒の木を上品とす、其形先丸くふとく、長く大いなる松茸に類せり、○下略

〔鶉衣前篇上〕謝二無馳走一辭

けふを麁菜の矢合せとして、雨の夕べ雪のあした、鍋摺粉木はさはがせずとも、いざと心のむかふにまかせて、折々の廻狀をはじむべし、

〔本朝文鑑八〕摺小木銘并序　藤如行

數ならぬみのゝお山の松の木は、君がやちよのためしにもひかれず、谷の坊にこぢとられて、すげなき法師にせられ、名をさへ摺小木とよばれぬる、すくせの果報も無念ならずや、そも七種のゆふべより、御忌御影供の寺々をかけめぐり、唐辛のために目をおどろかし、芥子のために鼻を